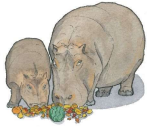


波と浮体の国際会議 in フランス

目で見ると
海外論文発表

飯田 隆人*

IWWWFB in France

Key Words : Water waves, metamaterial, backward waves,
equivalent circuit theory

<参加会議名> 33rd International Workshop on
Water Wave and Floating Bodies
<開催場所> フランス ギデル・プラージュ
<渡航期間> 2018年4月2日～4月9日
<発表タイトル> Backward Waves through Array
of Rectangular of Columns

4月初旬、フランス最西端ブルターニュ地方ギデル・プラージュには大西洋を抜ける冷たい風が吹きつけています。私が参加した「波と浮体の国際会議」は、海沿いに面したリゾートホテルにて開催されました。この会議は数学者である Evans 教授と海洋工学の研究者である Newman 教授（ともに伝説級の研究者）によって水波と浮体の問題に関して数学と工学双方の視点から議論すべく設立されました。採択されるのは60人程度のみ、著名な研究者の集まるハイレベルな会議として知られています。日本人参加者はほとんどおらず、今回は私と私の指導教官の二人だけでした。この会議は「ホテルに缶詰めになり議論する」のがモットーであるらしく、4日間を通じてシングルセッションの口頭発表・質疑応答が延々と行われます。

私がこの会議に参加するのは3回目になります。特に今年は前述の Evans 教授が司会を務めるセッションになり、かつ Evans 教授の一番弟子の Porter 教授と研究テーマが被るという偶然に見舞われ、これまでで一番緊張してしまいました。私の発表テ-

マは「角柱群によりバックワード波を起こす条件の導出」という、Evans 教授曰く ‘Hydro-mathematics’ という分野の研究です。私の研究は悪名高く、古典的な海洋工学でも数学的アプローチでもなく、水波の問題を等価な電気回路理論に落とし込んで解析的に解くという異端な手法を用いています。そのため毎年様々な研究者から、「私は電気のことにはわからん」と言われます。だからこそ発表の仕方には気を付けており、研究の本質を理解してもらい、かつ楽しんで聴いてもらえるよう構成を考え、大阪仕込みのネタを盛り込みました。そのおかげで、終わった後には「発表を楽しんだ」、「わかりやすく印象的な発表だった」と多くの方から声をかけてもらえました。

この会議では日本人がほとんどいないため、必然的に食事や休憩の時間は海外の研究者と話さなければなりません。これは時に発表するよりも苦痛ですが、それでも毎年少しずつ知り合いも増え、若手の研究者を中心に様々な情報交換や、将来的にはどんな研究がしたいのか、といった話ができました。刺激的な時間を過ごせたことを喜ぶとともに、そのご支援をいただきました生産技術振興協会様に心より御礼申し上げます。



* Takahito IIDA

1991年5月生まれ
大阪大学大学院工学研究科地球総合工学
専攻博士前期課程修了(2016年)
現在、大阪大学大学院工学研究科 海洋
空間開発工学領域 博士後期課程3年・
大阪大学大学院超域イノベーション博士
課程プログラム・日本学術振興会特別研
究員DC1 工学 船舶海洋工学
TEL : 06-6877-3496 FAX : 06-6879-7594
E-mail : iida_takahito@naoe.eng.osaka-u.ac.jp



Fig.1 発表の様子



Fig.2 会場の様子



Fig.3 バンケットで



Fig.4 パリ観光